

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-753-3013 (直通)

求める資料を求める人の手に (1)

竹本文夫 (同志社大学人文科学研究所)

1. 何故「求める資料を求める人の手にか」

京都支部が「求める資料を求める人の手に」を大図研運動の基本政策として提起してから3年目になります。この方針は、いま文部省などによって進められている図書館の「近代化・機械化路線」に私たちが有効に対決し克服していくため提起されました。

文部省や反動的大学当局が進めている近代化路線は、図書館員全員の能力に依拠するのではなく、ごく一部のコンピュータなど機械に詳しい人と職制のみを中心に図書館を運営し、あとの職員は経験など不要、極端に言えばアルバイトでも対応できるような図書館にしようとする路線です。

この「近代化路線」を押し進めるに当たって彼等もサービス増進を唱えています。その為この路線との対決は中々難しく見えます。しかし、彼等の弱点は具体的な利用者不在という点にあります。即ち、サービス増進といってもそれは抽象的な言葉だけのことであり利用者の要求を具体的に把握分析しているのではないということです。つまり彼等のいうサービスは無目的といってもよいものです。

一方現実の大学図書館はまだまだ図書資料が不十分であり、利用者の資料要求には十分

応えられていない状況であり、資料名は分かっているがその資料が入手できないという利用者の悩みは深刻です。大学図書館ではこの資料入手要求に応えることが特に重要です。

この要求に応える為には的確な収書、探しやすい情報、即ち、効果的で質の高い文献情報や目録の提供、優れたレファレンス活動、特に自館にない場合の徹底した所在調査など図書館活動のすべての分野にわたって改善努力していかなくてはなりません。

以上のような理由から「求める資料を求める人の手に」を徹底的に追及するならば、利用者と共同してよりよい図書館作りを進めることができ、またいま進められている無目的且つ人間不在の近代化機械化路線に対決し克服することができると思えば支部委員会は確信しています。

この方針を具体化していくことは今年度の重要な課題であり、そのため今後支部報にこの問題についての記事を連載していくことになりました。今月はその第1回です。

2. 特定の館員が特定の調査に深く関わることについての柴田氏の意見

昨年11月の支部報 No. 60 の“CIS/Index”

の最後で柴田正子氏がこの問題に触れているので少し考えてみたいと思います。

芝田氏は次のように言っています。「京都支部の基本方針である『求められる資料を求める人の手に』について一言申し上げます。この基本方針を言葉通りに受け取ると、何が何でも要求された資料は夜を徹してでも捜し出して、その人の手に渡すことが良しとされている様に見受けられます。時々、特定の利用者の要求に身を挺して、サービスする人の姿を見かける事があります。これは一面京都支部の基本方針に合致するかもしれませんが、しかし、組織の中で、一人だけがこうした態度でのぞまれる事は、組織の規律をみだすことにもなりかねません。組織、或は、集団として、『求められる資料を求める人の手に』を遂行することは、資料を体系的に整理し、いつでも、誰でもが、利用者とその資料を提供出来る様にする事であると思います。今日のように、情報が複雑かつ多様化する一方、人員が減少していく中で、より効果的なサービスをするには、一人一人が実力をつけていくのは当然であるが、組織として、或は集団として、より向上的なサービスをしていく事が必要ではないでしょうか。」

3. 個人と集団の関係

おそらく柴田氏がここで言っているのは、特定の館員が、特定の人とか階層（例えば教員）にだけ過剰とも思えるサービスをしていることに苦言を呈しているのだと思います。全く同感です。また、後半の、誰でも、いつでも出来るよう資料を体系的に整理すべきだということも当然であり、重視すべき基本姿勢だということも全くご指摘のとうりだと思います。

しかし前半の部分に関しては読みようによっては、特定の質問に余り深入りして同僚に迷惑をかけるなども誤解されそうな気もするので少し私の意見を述べさせてもらいます。

支部委員会が提起しているこの方針は、誰であれ利用者であればその階層の如何を問わず同様なサービスをするということは当然の前提としています。

また、職場の実情を無視して夜を徹しても探せなどということは言うてはいません。利用者の資料必要度に依じて、そしてその職場で可能な範囲内であることも当然です。

しかし、忙しいからといって利用者がどうしても入手したい資料について適当な調査でお茶を濁し、「分かりません」ということにすべきではないといっているのです。

経験の浅い人にとってこれ以上調査のしようがないと思われる場合でも、ベテランの図書館員から見れば調査の方法がある場合もしばしばあります。従って簡単には諦めるな、というのがこの提起の第1点です。

第2に、大学における利用者の資料入手要求の切実さについて職場集団として理解を深めることの重要性を訴えたいと思います。誰であれ利用者から所在調査の依頼を受け、その業務に専念しているとき、その人が余分の仕事をしているのではなく重要な仕事をしていると理解し、その為にある程度のしわ寄せがあるとしても出来るだけ皆が受け入れることの出来る職場作りが大切だと思います。

第3に、貴重な時間を使って問題を解決したときは、その方法と結果を皆に明らかにし、全体としてその職場集団の力量を高めることに意を注ぐべきだと思います。初めての場合は時間がかかっても、一度経験すれば同じような調査は2度目からは能率よく出来るようになります。徹底調査をしなければいつまでたっても進歩はありません。一人の人の経験が皆のものになれば全体としては合理的な筈です。

第4に、ベテランの人を職場のみんなが支えることの重要性も強調したいと思います。どの職場であっても皆が同じ水準にあるわけではありません。矢張ベテランの活躍はどう

しても必要であり、そのベテランの持っている知識力量を皆が如何に効果的に共有するかが大事だと思います。勿論ベテランが皆の力量を上げるよう努力することは当然です。

第5に、その職場だけでなく全国の優れたライブラリアンの力量を私たちが効果的に共有することも大切な視点です。そうした意味で大図研ネットワークの重要性を訴えます。自分の力量だけではどうにもならないとき、他大学の大図研会員に聞いて解決することはしばしばあります。私もいろいろ皆さんに教えてもらいました。

以上述べたような理由から調査依頼があった場合その職場で許される限り徹底調査することの意義は明らかだと思います。

4. 最近経験した事例

或る研究者が昨1989年の12月中旬次のような調査を私のところに持ってきました。丸山舎書店というところから戦前に出版された『和田豊作傳』という本を見たい。同志社にはどこにもなく、自分が調べたところ国会図書館にもない。自分の研究テーマにとってこれなくしてはこれ以上研究が進められない。この伝記にあることを基礎にして研究を進め、予定されている自分の研究発表をしたいので何とか見つけてくれないか、とのことでした。詳しく聞くと、或る本のうしろの広告に「好評続々」としてこの本のことが出ている。広告を載せている本の出版年は昭和11年10月。また、別の丸山舎書店の広告に、その出版社の選書としてこの和田豊作傳が出ているという話でした。そして私の求めに応じてそれらのコピーも持ってきました。

そのコピーを見ると、著者は元信濃毎日新聞編集長富田岩代という人で、確かに研究者が言った通りのことが出ていました。その広告の別の本のところには新刊とか、近刊とか出ておりこの和田豊作傳のところだけに「好評続々」と出ており明らかにその時点で出版

されていると思われました。また、この出版社はマイナーなどところではないかとのことでした。彼は、京大、阪大、東大などが持っている可能性があるといっていました。

私も一応国会図書館の目録を大正の初めから昭和20年代迄調べ、ないことを確認し、次に上記3大学に問い合わせましたが残念ながら「ない」とのことでした。

和田豊作という人は篤農家であり、戦前の人物であることから、戦前からの農学関係に強い大学、特にこうした人物に関心を持っていそうな研究者のいるところを中心に更に13機関に毎日午前と午後それぞれ2ヶ所ずつ問い合わせました。しかしどこにもありませんでした。

この時点で研究者が長野の県立図書館にも問い合わせていたこと、更に被伝者の家に迄探しに行ったが見付からなかったことも分かりました。それでこれは容易には分からないと思い、東大の加賀谷氏に知恵を借りる為電話しました。加賀谷氏は、農林水産省の農業総合研究所と最近十年位のうちにできた農協の図書館（正式名称は忘れた）にそうしたものが有る可能性があるかと教えてくれました。さっそく農業総合研究所に問い合わせましたがそこは持っていませんでした。

もう一つの農協の図書館は正式名称が中々分からず、京大の農学部に今までの経過もお話して問い合わせました。この頃には私も大方諦めかかっていたのですが、2時間後に返事があり、本は東京町田の「協同組合図書資料センター」に有ること、現物が確かに書架に有ること、閲覧は可、複写は不可ということを確認したこと、『日本農業文庫目録』に和田豊作傳が出ていること、協同組合図書資料センターの住所と電話番号は『専門図書館総覧』に出ている、という見事な模範解答でした。

『専門図書館総覧』を見ると、協同組合図書資料センターの特殊コレクションの中に

「日本農業文庫」が出ていました。この所在調査は、もし加賀谷氏の農協関係の図書館というサジェッションがなく、また京大農学部図書室の大月氏が調べてくれなければ私には分からなかったでしょう。

私は早速研究者の自宅に電話し、所蔵館とその住所および電話番号を知らせました。彼は大変な喜びようで翌日早速町田に飛びました。そしてその他の文庫目録も貰って帰って来て我々にそれを寄贈してくれました。

結果が分かってから私も追跡してみました。同志社の目録を調べると『日本農業文庫目録』は図書館と私の職場である人文科学研究所にも所蔵していました。更に『日本の参考図書』を見ると、何と農業・農学の書誌・索引のところにこの目録が出ているではありませんか。しかもその書誌のところの点数はそんなに多くはなく、戦前だけの図書のことになればごくわずかです。

もし私をはじめに日本の参考図書を調べたならば、そんなに時間をかけずにこの日本農業文庫目録にたどりつき、第3巻の著者索引から『和田豊作傳』を発見していたことでしょう。そこまで分かれば「協同組合図書資料センター」のことを知らなくても、目録の編

纂者である農林省図書館に聞けば所在が簡単に分かった筈です。また、文庫の所在目録もいろいろあります。私がこの所在調査に手間取ったのは単に『和田豊作傳』としてのみ探していたからでした。東大の加賀谷氏もまさか私がそういうものを調べず、ただやみくもにあちこち問い合わせているとは思わなかったのでしょうか。

この私の拙劣な所在調査からの教訓は、調査は手当たりしだいにするのではなく、原則的に接近すること、途中で諦めないこと、分からないときはその分野のベテランに聞くこと、などが大事だということを教えていると思います。そしてたとえ自分の力量は不十分であっても熱意さえあれば、そして、先輩やベテランの力量に依拠すれば何とか目的を達することができる場合が多いということを示していると思います。

また、こうした経験をすると調査方法について身に沁みだ勉強になります。この成果を自分の職場全員のものにするよう努力するならば、この調査に費やした時間は決してみんなにとっても無駄なものではないと言えるのではないのでしょうか。

近畿地区5支部新春合同例会

日時 1990年2月3日(土)午後2時—
場所 大阪府立大学学術交流会館
(地下鉄御堂筋線梅田駅から なかもず行きに
乗り35分、終点で下車、徒歩15分)
内容 映画と講演
「バラの名前」と図書館
講師・徳永康元(関西外国語大学教授)
懇親会 5時30分—

第2回図書館施設研究会

日時 1990年2月17—18日(土・日)2時—
場所 京都府立大学附属図書館 視聴覚室(3階)
テーマ 「大学図書館の面積」